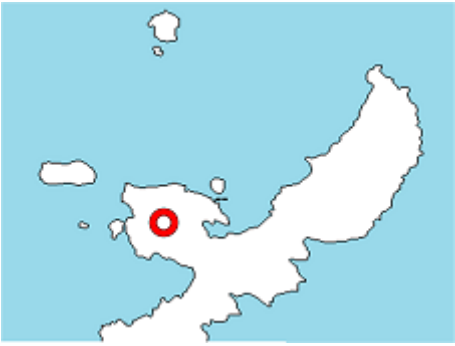
上原米子さん

1928（昭和3）年生まれ

所属　なごらん学徒隊
（県立第三高等女学校）
沖縄陸軍病院北部分室

戦地　八重岳（本部（もとぶ）町）



●1944（昭和19）年10月10日　最初の看護活動

三高女に野戦病院があった。10・10空襲でケガをした人たちが、大勢学校に運ばれてきた。寄宿舎にも大勢収容した。ガーゼも十分になく、煮沸して再利用する状態。助かる見込みがある人とない人で分けられていた。「水をくれ」と言う人が多かったが、水を飲むと亡くなる人もいた。死者を畑に運んで火葬した。

●1945（昭和20）年3月　沖縄陸軍病院北部分室（八重岳野戦病院）へ

1月から看護教育を受けていた20人のうち10人が看護隊にとして八重岳の野戦病院へ。地元の人が気を切り出して石を積んでつくった茅葺の小屋が野戦病院の建物だった。最初はまだ10･10空襲のときの負傷者を治療していた。敵が上陸すると、艦砲や空爆を受けてケガをした人が運ばれてくるようになった。

麻酔なしの手術で手足の切断をしていた。ほとんどの兵隊は喚いていたが、ある兵隊は足を切断されて「あー、やっと軽くなった」と冗談を言った。切った手足を捨てに行った。

●1945（昭和20）年4月16日　八重岳を撤退

命令があったかどうかはわからない。婦長さんに、寝たっきりの人にカンメンフと手榴弾を配りなさいと言われて、2人で配った。最後の部屋で、「看護婦さん、こんなの配ってどこにいくんですか」と聞かれても、本当にわからなくて答えられなかった。部屋を出るとき、患者さんが「海ゆかば」を歌っているのが聞こえた。

自分たちの壕に戻るとだれもいなくて、疲れて眠ってしまっていた。いきなり蹴飛ばされた。衛生兵が撤退するから準備しろというので外に出ると、みんな列をつくって並んでいた。多野岳に撤退するというので、患者さんを真ん中にして1列になって歩いた。

朝7時ごろ、いきなり砲弾が飛んで来てたくさんの人がやられた。胸に破片を受けた人、足の切れた人･･･みんな逃げなさいと言われた。私たちは、やっぱり職業意識があったのか、ケガ人の治療をして、逃げようとしたら、足が大きな棒で殴られたような痛みを感じた。地下足袋をとったら、靴下が真っ赤。小指と薬指の間に破片が入っていて、取ろうとしても全然取れない。消毒して三角巾で包んだだけ。周りはたくさんの人が倒れていて、逃げられる人は逃げるし、残る人は残るし、という状況。

私が「ケガをして進めないからここに残る」と言うと、友達が2人、「あんた1人残していけないから一緒にいる」と言って残ってくれた。そこに衛生班長が来て、もう一緒に死のうと言ってポケットから手榴弾を出して安全ピンを抜いて鉄兜にカチンと当てようとした。友達が飛び起きて手榴弾を奪って、「班長、死にたかったら1人でどっか行って死んでください。私は今死にたくないから」と言った。この友達はアルゼンチンの2世だった。

そこへ、先に逃げていた看護婦のお姉さんが私のケガが気になって戻って来てくれた。「私がおぶってあげるから一緒に行こう」と言ってくれたので、おんぶされて進み始めた。数m行ったところで、首が吹っ飛んだ兵隊の死体を見て、怖くて進みたくなくなって、「すみません、降ろしてください。私は行きたくないから。お姉さん1人で進んでください」と言って降ろしてもらった。お姉さんが先に進んでいくと、この人が行った先に爆弾が落ちた。「うーん」というううめき声がしたがどうすることもできない。

友軍の人が来て案内するというのでついていった。途中、負ぶってくれた看護婦さんがあおむけに倒れていた。よんだけど、もう返事がなかった。山と山の間に大勢が集まっていて、一緒に出発した。私は四つん這いで這って歩いた。

別の隊の中隊に、「女は足手まといだからついてくるな」と銃を向けられた。仲間だと思っていたのに、一生懸命やってきたのに、とても悔しくて涙が出た。やられると思ったら、後ろをずっとついて来ていた衛生班長が「この人は今まで看護婦さんとして野戦病院で一生懸命働いていたけど、ケガしてこうなった。その人にお前は銃を向けるか」と言ってくれて助かった。

（取材日：2012年2月6日）